



政府の年金制度一本化案に抗議する公共交通機関ストライキに合わせて行われたデモ行進の様子 (2019年12月撮影)

為政者と民衆の思いが交錯するまち・パリ

パリは、ヨーロッパの政治、経済、文化の中心地であるとともに、その歴史舞台の中心地であり続けてきました。パリに住み始めてから、この街の歴史エピソードを見聞きする機会が増えたせいか、これまであまり歴史に興味のなかった私も、歴史の現場に自ら足を運ぶようになりました。

ここで興味深い歴史エピソードを一つご紹介します。私はある週末、パリ郊外にあるヴォー＝ル＝ヴィコント城を訪れました。この城を建設したのは、ブルボン王朝国王ルイ14世のもとで大蔵卿を務めていたニコラ・フーケという人物です。彼はお金の運用に長け莫大な財産を蓄えていたのでルイ14世からもともと警戒されていたのですが、それよりも、この華麗なる城を建造したためにルイ14世から大いなる嫉妬を買い、城の披露宴パーティーから19日後に、なんと、国家財産横領の罪で牢獄に入れられ、二度とこの城に戻ることはありませんでした。その後、城の美しさにほれ込んだルイ14世は、城の建築を担った建築家や

造園家、画家らに、そのままヴェルサイユ宮殿の建築に従事するよう命じました。これが、ヴォー＝ル＝ヴィコント城がヴェルサイユ宮殿のモデルと呼ばれる由縁です。まさかあのヴェルサイユ宮殿が、ルイ14世の「男の嫉妬」から生まれたとは驚きですね。そして、ヴェルサイユ宮殿の莫大な建設費用がブルボン王朝の財政難を招き、のちのフランス革命の一因となったことはよく知られたところ です。

近年パリでは、ガソリン税引き上げに端を発した黄色いベスト運動や、政府の年金制度一本化案に抗議した公共交通機関ストライキの長期化など、市民が声高に政府に抗議する場面が増えています。私もその現場に何度か遭遇しましたが、そうした市民運動の光景を目の当たりにすると、パリが為政者と、その国家運営に対峙する民衆の姿を今なお映し続けているように思えます。

(経済協力開発機構、パリ)

*本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。



ヴェルサイユ宮殿のモデルとなったヴォー＝ル＝ヴィコント城 (左) と、それに倣ってルイ14世が建造したとされるヴェルサイユ宮殿 (右)